

2012 年度 第 3 回 全体研究会

「エンゲイジド・ブディズムの潮流」 (第 1 回)

報告題目	インド亜大陸における仏教復興の現状——東部オリッサ州を中心に
開催日時	2012 年 5 月 30 日 (水) 16:45-18:15
開催場所	龍谷大学大宮学舎南翼 2 階 203 教室
報告者	田中公明 (財団法人東方研究会研究員)
ファシリテーター	桂 紹隆 (龍谷大学文学部教授・BARC センター長)
コメンテーター	能仁正顕 (龍谷大学文学部教授)
参加者	63 人

【報告のポイント】

田中公明氏は、インド東部に位置するオリッサ州に栄えた仏教の伝統を概観した後、仏教の尊格への言及が記されていると伝わる *Sishu Veda* というテキストなどに関する、自らの現地調査の結果を報告した。

【報告の概要】

インドにかつて栄えた大乘仏教が再発見されたきっかけは、英国の外交官 B. H. ホジソン (1800-1894) が 1820 年にネパールのカトマンドゥに入り、失われたインド大乘仏教の末裔であるネパール仏教徒に出会ったことにある。ホジソンが都合 21 年にわたる駐在期間中に蒐集した 381 帙におよぶサンスクリット仏典は、英仏両国と、当時英国の植民地となっていたインドの大学・研究機関に寄贈され、その後の仏教研究に大きく貢献した。ホジソンがベンガル・アジア協会に寄贈したサンスクリット仏典の概要は、1881 年にインドにおいて、ラジェンドララーラ・ミトラ (1824-1891) が *The Sanskrit Buddhist Literature of Nepal* を刊行し、明らかにした。

また、ラジェンドララーラ・ミトラの助手を務めたハラプラサド・シャーストリ (1853-1931) は、*The Discovery of Living Buddhism in Bengal* (1897 刊) の中で、ベンガルの下層カーストの間に伝えられる法格 (Dharma-*thākura*) 崇拝こそ、かつてベンガルに栄えた仏教の名残であると論じた。さらに、彼の研究に触発されたナゲンドラナート・ボースは、*The Modern Buddhism and its Followers in Orissa* (Calcutta, 1911 刊) を著し、主として彼が赴任していたオリッサ東北部マユルバンジでの経験と、その地に伝わるテキストによって、

オリッサにも同様の事例があることを報告した。そのころすでにベンガル・ルネッサンスの旗手となっていたハラプラサド・シャーストリは、*The Modern Buddhism and its Followers in*



Orissa に長文の序文を寄せた。その末尾に、エドワード・ゲイトからの報告として、オリッサのカタックとプーリー地方に居住する「サラキ・タンティー」と呼ばれるカーストが、いまなおヒンドゥーの神々とともにブッダを崇拝していると指摘した。さらに彼は、「サラキ」というカースト名は、仏教の用語である「シュラーヴァカ（声聞）」が転訛した形であると論じた。

田中氏は上記の説明に、現地調査およびインド人学者との交流のなかで獲得した情報を加えて、以下の3点を本研究会で明らかにした。

- ① オリッサではバウマカラ王朝の時代、『大日経』や『金剛頂経』系の密教が栄えていた。
- ② オリッサには「サラキ・タンティー」と呼ばれる仏教徒カーストが残存しており、彼らはかつて大乘仏教と密教の混淆形態を信奉していたと考えられる。近年、Mahabodhi Societyの布教活動によりテーラヴァーダ仏教式の勤行や儀礼が普及し、本来の信仰は失われつつある。
- ③ 彼らは *Sishu Veda* というテキストを伝えており、そこには仏教の尊格への言及が見られると言われる。ビマレーンドゥ・モーハンティは、*Sishu Veda* はマニアバンドゥのサラキ・タンティーが伝えたものだというのが、マニアバンドゥの仏教協会も、ブバネーシュバルの Mahabodhi Society も、このテキストについて認知しておらず、ウトカラ大学所蔵の膨大なサンスクリット・オリヤー写本にも含まれていない。

【議論の概要】

能仁氏は、オリッサにおけるサラキ・タンティーの仏教徒カーストのテーラヴァーダ仏教への改宗について質問した。オリッサにおける日本山妙法寺や Mahabodhi Society の活動はさほど古くないにも関わらず、そもそも大乘仏教と密教の混淆形態を信奉していたサラキ・タンティーが、なぜそれまでの仏教伝承を忘れ、簡単にテーラヴァーダ仏教に改宗できたのかという質問内容であった。それに対して田中氏は、インド亜大陸におけるカーストやエスニック・グループの仏教への改宗は、「集団改宗」という視点で考える必要があると指摘した。例えば、あるグループに長老層が存在する場合、彼らは何らかの理由で仏教に改宗すると、そのグループ全員がそれに伴って改宗することとなる（個人で改宗する

場合は、自らの出身カーストと縁を切らなければならない)。サラキ・タンティーの改宗はまさに、長老層が決めたものであり、改宗のプロセスには社会的な背景が存在することが具体的に示された。また、フロアからは、現代インド、殊にタミルナードゥ州において、仏教徒になるメリットについての質問がなされた。それに対して田中氏は、そのような改宗の問題は、比較的長い歴史をもつアンチ・バラモン運動を通して考察しなければならないと指摘した。

